

わが国における「看護師-患者関係」に関する研究の動向
- 1987年から1994年に発表された文献を通して -

(看護師 - 患者関係 / 研究の動向 / 看護の歴史)

長田京子*・池田明子**

Trends in Studies on Nurse-Patient Relationship Published
Between 1987 and 1994

(Nurse-patient relationship / Trends in studies / History of nursing)

Kyoko OSADA*, Akiko IKEDA**

This study examined trends in studies on nurse-patient relationship. We surveyed 68 studies published between 1987 and 1994, and classified their major features. A rapid increase in the number of nursing colleges occurred during this period. The following study categories were extracted: 1) analysis of interaction, 2) response of nurse and patient, 3) factors that promote interaction, 4) factors that disturb the establishment of nurse-patient relationships, 5) ways to promote interaction and their effects on nursing. These categories were divided into fundamental research aimed at clarifying nurse-patient relationships and practical research aimed at advancing relationships. We concluded that studies on nurse-patient relationships should be continued in higher education for nurses and that the results of these studies should be used to optimize active nursing services.

研究目的は「看護師 - 患者関係」に関する研究の動向を明らかにすることである。看護系大学が急増する前段階である1987年から1994年までに発表された68文献を概観し、研究内容の類似性を比較して分類した。分析の結果、5つのカテゴリー、1) 相互作用の分析、2) 看護師と患者の反応、3) 相互作用を促進させる要素、4) 関係成立を困難にする要素、5) 相互作用を促進させる方法および看護上の効果、が抽出された。これらはさらに、「看護師 - 患者関係」を解明する基礎的研究と、「看護師 - 患者関係」を発展させる実践的研究にまとめられた。今後は、看護の高等教育化が定着した段階においても「看護師 - 患者関係」の研究を継続し、「看護師 - 患者関係」の中に潜む看護の本質的な要素を浮き彫りにして研究成果を看護実践に活用していくことが必要である。

I. はじめに

近年わが国の看護をとりまく環境は大きく変化し、特に1990年代後半には、看護大学・大学院の急速な増加や専門看護師・認定看護師制度の誕生など、教育の高学歴化や上級資格制度化の傾向が認められる。また、国民の健康への意識の向上に伴い、医療従事者には、職業的な倫理性や専門性を基盤として個人のニーズに対応する質の高いサービスの提供が求められている。このような変化の中で、看護職（保健師、助産師、看護師を総称して以下看護師とする）はその専門性を発

揮し、患者（看護の対象者を総称して以下患者とする）個々のニーズにあった看護を提供していく必要がある。

看護師と患者との関係は看護の重要な要素の一つであり、相互作用の過程においては、その時その場で表現される両者の言葉・表情・行動のみならず、内面世界に潜む思考・感情・価値観などが複雑に絡みあって変化している。アメリカ看護師協会によれば、看護とは、現にある、あるいはこれから起こるであろう健康問題に対する人間の反応を判断し、かつそれに対処すること¹⁾であり、看護師と患者との関係を探求していくことは看護の本質を追及するとともに看護サービスの質の向上に役立つと考えられる。

わが国の「看護師 - 患者関係」に関する文献研究には、1968年から1974年まで7年間の研究を対象にした中西ら²⁾の報告があるが、それ以降はみあたらない。

*基礎看護学講座 Department of Fundamental Nursing

**北里大学大学院

Graduate School of Nursing, Kitasato University

この7年間を含む1968～1982年頃は、高橋ら³⁾によれば、総合看護の実現に向けた看護体制の模索と看護学教育の充実、看護学確立への胎動の時期であり、看護系の大学や学会は誕生したがその数がわずかに限定されていたという歴史的特徴がある。これに続く1983～1992年頃は、看護の専門分化と看護体制の発展、および看護教育制度の整備の時期であり、1993年頃から看護の専門分化や高等教育化が進行して生涯教育への道の拡大へと、看護は発展してきた³⁾。このような看護および看護教育の変化は、即ち看護研究を行う環境の変化であり、研究そのものも時代の影響を受けて変化していくのではないかと考えられる。看護が学問として発展していくためには新たな研究を蓄積していくことが必要であるが、同時に、これまでにどのような研究が行われてきたかという歴史的観点から文献検討を行う必要性がある。

このような歴史的背景にもとづいて、本研究では、中西らの文献研究以降から看護の専門分化や大学教育化が進行するまでの過渡期である1980年代後半から1990年代前半において、「看護師 - 患者関係」についてどのような研究が行われてきたかを明らかにする。

なお、「看護師 - 患者関係 (nurse-patient relationship)」の用語の定義は、日本看護科学学会看護学術用語検討委員会による概念規定を用い、「看護職者と患者との間の相互作用の過程であり、看護過程の成立基盤である。その過程には、患者の言動、看護職者の思いや意図、看護職者の言動、および患者の反応が含まれる。この関係は、看護職者が積極的に患者に関心を注ぎ、両者が共通の目標にむかってすすめるよう専門知識・技術を活用することによって信頼関係へと発展する。」⁴⁾とする。

II. 方 法

1. 文献の抽出方法

文献の抽出にあたっては、看護学ならびに隣接諸科学の学会誌・紀要・専門雑誌などに発表された研究から広く抽出するために、多くの研究が集録されているわが国の代表的な看護系文献集の「看護師 - 患者関係」に分類された文献に注目した。そして、より学術性の高い研究を抽出するために、看護学の研究者によって研究内容を吟味・編集されている日本看護関係文献集から抽出することにした。発表年は、看護の専門分化や看護教育制度の整備が進みはじめた1980年代後半から、文献集の目次構成が改正された1987年から、看護系大学が急増しはじめる1994年までの8年間とした。

文献の抽出基準は、掲載された全文献の中から、研究内容が看護師と患者（家族を含む）との人間関係に焦点をあてているもの、記述形式として問題・目的・方法・結果・考察が記述されているもの、を同時に満たすものとした。看護職以外の医療職者と患者との関係、医療問題や病院管理に関する内容、海外文献の紹介等、は除外した。

2. 分析の方法

分析にあたっては、まず、全体の傾向をみるために、発表方法（発表形態、発表先）、筆頭研究者の所属、研究の対象と方法を集計するとともに、より質の高い研究として原著論文にはどのような内容のものがあるかをまとめた。次に、個々の文献について研究内容の特徴を表す1～数個の言葉を論文から抽出して内容を簡潔に表現した後、研究内容の類似性を比較分類し、その特徴を表すカテゴリー名をつけた。なお、分析はその妥当性を高めるために数週間の期間をおいて繰り返し、分析対象となった文献は本研究の文献抽出基準に則っているか、分類およびカテゴリー名は妥当かについて研究者間で検討を重ねた。

III. 結 果

日本看護関係文献集に掲載された文献の総数は39,157題であった。このうち「看護師 - 患者関係」に関する文献は161題で、全題数の0.4%であった。さらに本研究の文献抽出基準に則って抽出された文献は68題であり、これらが分析の対象となった。

1. 文献の全体的傾向

1) 発表の方法 (表1)

発表方法別にみると、学会への口頭発表（以下、学会発表）が51題で75.0%を占めていた。なかでも、日本看護学会（29題、42.6%）と日本看護科学学会（20題、29.4%）が顕著であった。時代背景による違いの有無をより詳細にみるために、1990年以前と1991年以降に二分して合計題数を比較したところ、日本看護科学学会における学会発表が6題から14題に増加する傾向がみられた。一方、論文発表は17題（25.0%）で、その発表先は主に看護系雑誌（11題、16.2%）であった。

2) 研究者の所属 (表2)

筆頭研究者の所属は、大学等の教育機関が37題（54.4%）、病院等の臨床（看護実践の場として企業を含める）が29題（42.7%）、行政が2題（2.9%）であった。なお、教育機関と臨床の発表題数についても変化をより詳細にみるために1990年以前と1991年以降の合

表1 発表方法

発表形態・発表先	1987～1990	1991～1994	計 (%)	
学会発表	日本看護学会	17	12	51 (75.0)
	日本看護科学学会	6	14	
	日本精神科看護学会	1	1	
	日本農村医学学会		1	
論文発表	日本看護科学学会	1	1	17 (25.0)
	日本看護研究学会	1	1	
	大学・短大の紀要	2	1	
	看護系雑誌	6	5	
計	34	34	68 (100)	

表2 筆頭研究者の所属

所属	1987～1990	1991～1994	計 (%)	
教育	短期大学	8	11	37 (54.4)
	大学	3	7	
	専修・専門学校	4	1	
	大学院		2	
	研修所	1	1	
臨床	病院	18	10	29 (42.7)
	企業		1	
行政		2	2	2 (2.9)
計	34	34	68 (100)	

表3 対象となった看護領域および患者の特徴

n = 28

看護の領域	患者の特徴 ^{注)}	件
慢性期の患者と家族の看護	慢性疾患患者, 患者の意志表出, 患者・家族教育 糖尿病教室, 糖尿病教育入院, 植物状態患者と家族	7
母子看護	患児, 入院児の母親, 痛みを体験している子ども	6
精神疾患患者の看護	精神科病棟, 境界例, 躁状態の患者	4
終末期患者と家族の看護	終末期患者, 家族	2
外来・地域における看護	職域健康診断の受診者, 外来	2
I C U	自殺企図患者・家族	1
その他	受容的支持を必要とする患者・家族, 成人男性患者 心を閉ざす, 不満, 怒り, 拒否, トラブルの多い患者 意欲を失い臥床を続ける患者	6

注) 患者の特徴にはテーマに記載された表現を一部抜粋して示した

計題数を比較したところ、臨床は18題から11題に減少し、教育機関は16題から21題に増加する傾向がみられた。

3) 研究対象の特徴 (表3)

研究が行われた看護領域は、慢性期、母子、精神疾患、終末期などであった。患者の特徴については曖昧で具体的に示されていないものもあったため、ここではテーマに明記された28題についてのみその表現を一部抜粋して示した。対象の特徴としては、「慢性疾患患者」「終末期患者」など前述の看護領域を示す表現のほか、「心を閉ざす」「不満」「怒り」「拒否」「意欲

を失う」など患者の心理状態を示す表現がみられた。

4) 研究の方法

研究方法では、統計的解析を用いない質的研究が45題 (66.2%) であった。これらは主に事例研究であり、データ収集は観察・面接が中心で、分析は内容分析、看護師と患者の相互作用場面の分析、日数や病状経過のステージ別分析などであった。統計的解析を用いた量的研究は15題 (22.1%) で、うち14題が集団を対象とした質問紙調査であった。質量併用の研究は8題 (11.8%) であった。

表4 「看護婦 - 患者関係」に関する原著の一覧 (1987~1994)

年	テーマ	著者	発表先
1989	看護者 - 患者関係における言語的・非言語的コミュニケーションの行動計量的分析 - 患者主導型および看護者主導型会話効果の比較 -	山本他	日本看護研究学会誌
1989	看護教育における人間関係論の教育効果測定に関する研究 (第1報) - 「発言内容分析基準表」の検証 -	村瀬他	日本赤十字看護大学紀要
1989	看護婦の認知する共感の構造と過程	小代	日本看護科学学会誌
1990	看護婦からみた患者の了解不能性の分析	川名	看護研究
1992	入院中の小児に対する看護婦の言動に関する研究 (混合病棟において) - 人格の発達を支えるという視点から -	吉田	日本看護科学学会誌
1993	慢性病患者の看護援助の構造化の試み - 糖尿病専門外来看護の臨床経験を通して -	正木	看護研究

表5 研究内容の分類

カテゴリー	内容	計 (%)
「看護師 - 患者関係」を解明する基礎的研究	相互作用場面の言語の数量・内容 特定看護領域における相互作用 看護師と対象者との関係の形成 看護師と対象者との関係の評価	18
	看護師の態度・認知・言動 看護師に対する患者の期待と評価 看護師と患者の認知の比較	19
	共感, 受容, 傾聴 ケアリング やさしさ ユーモア	9
	拒否, 不満, 怒り 看護師からみた患者の了解不能性 看護師の認識の変化	11
	看護の方法: 傾聴, 受容, 支持, 陽性ストローク 母親的対応 甘え概念の活用 看護の効果: 患者の感情・意志の表出 患者の意欲の向上 患者の満足, 成長, 自立 人間関係の成立	11
相互作用を促進させる方法と看護上の効果	11	11 (16.2)
相互作用を促進させる要素		9
関係成立を困難にする要素		11
相互作用を促進させる方法と看護上の効果		11
相互作用を促進させる要素		9
関係成立を困難にする要素		11
相互作用を促進させる方法と看護上の効果		11
相互作用を促進させる要素		9
関係成立を困難にする要素		11

5) 原著論文 (表4)

原著と明記されたものは6題 (8.8%) であった。1989年には、山本ら⁵⁾による患者主導型と看護者主導型の会話効果の分析や、村瀬ら⁶⁾による看護教育における人間関係論の効果測定のための発言内容分析基準表 (自己と他者について認知していることを表現するレベルを1~4で示したもの) の作成と検証が行われ、コミュニケーションの計量・測定に関する報告がされた。また、「看護師 - 患者関係」に影響する要素について、小代⁷⁾は「看護師 - 患者関係」を進展させる要素として看護婦が認知する共感の構造と過程を明らかにし、川名⁸⁾は「看護師 - 患者関係」を困難にする要

素として患者の不可解な心理や行動など看護婦が納得しがたい現象を検討して看護婦の患者に対する認識方法について問題提起をした。対象を特定看護領域に限定した報告では、吉田⁹⁾は入院中の小児の人格の発達を支えるという視点で看護婦の言動を分析し、正木¹⁰⁾は糖尿病専門外来看護を通して慢性病患者の看護援助の構造化を試みて報告した。

2. 研究内容による分類 (表5)

研究内容の類似性を分析したところ、5つの要素「相互作用の分析」「看護師と患者の反応」「相互作用を促進させる要素」「関係成立を困難にする要素」「相

相互作用を促進させる方法と看護上の効果」が抽出された。これらはさらに、看護師と患者の相互作用の分析や両者の反応を手がかりに「看護師 - 患者関係」を解明する基礎的研究と、ある特定の方法で看護を行った結果「看護師 - 患者関係」が発展して看護上の効果が認められたという実践的な研究にまとめられた。なお、原著は全て基礎的研究に分類された。

以下に、抽出された要素に従って述べる。

1) 「看護師 - 患者関係」を解明する基礎的研究 (57題, 83.8%)

これらは「看護師 - 患者関係」とは何かという問題を解明しようとする研究であり、基礎的研究と位置づけられた。さらに、何を手がかりに解明するかという視点から分析した結果、次の4タイプに分類された。

「相互作用の分析」に関する研究 (18題)

これらは看護師と患者の相互作用の過程を全体的に分析して解明しようとするものである。分析方法としては、相互作用場面における言語計量や発言内容の分析、看護師と患者の関係形成の分析および評価、などが行われた。

「看護師と患者の反応」に関する研究 (19題)

これらは看護師と患者の特定の反応に注目し、その反応を手がかりに解明しようとするものである。手がかりとされた反応は、「患者の看護師に対する期待・評価」「看護師の態度・認知・言動」「看護師と患者の認知の比較」などであった。

「相互作用を促進させる要素」に関する研究 (9題)

看護師と患者の関係が促進された事例をもとに、相互作用に影響する肯定的な要素を抽出するものである。肯定的要素として明らかにされたのは、「共感」「受容」「傾聴」「ケアリング」「ユーモア」などであった。

「関係成立を困難にする要素」に関する研究 (11題)

上記と対局し、看護師と患者の関係成立を困難にする要素を抽出するものである。明らかにされた要素は、「患者の拒否、不満、怒り」「看護師からみた患者の了解不能性」「看護師の患者に対する認識の変化」などであった。

2) 「看護師 - 患者関係」を発展させる実践的研究 (11題, 16.2%)

これは、「相互作用を促進させる方法と看護上の効果」に関するもので、ある特定の方法で看護した結果、相互作用が促進されて関係が深まり、看護上の効果が認められたという趣旨の実践的な研究である。対象となった事例は、「心を閉ざした患者」「意欲を失った患者」「糖尿病患者」「躁状態の患者」「境界例の患

者」「末期患者の家族」などであった。用いられた看護の方法は、「傾聴・受容・支持などのカウンセリング技術の活用」「母親的対応」「甘え概念の活用」などであった。そして、このような看護の成果を示す患者側の肯定的変化としては、「感情や意志の表出」「意欲の向上」「満足、成長、自立」などが観察され、人間関係の成立が認められていた。

IV. 考 察

1. 研究が行われた時代背景

本研究で抽出された文献68題の発表先は、日本看護学会 (1967年創設) と日本看護科学学会 (1981年創設) で全体の7割以上を占めていた。発表先で多いのは、1990年以前は日本看護学会であり、1991年以後は日本看護科学学会であった。文献数も少なく断定はできないが、日本看護科学学会は1987年に学会として認可されたこともあり徐々に発表数が増加したのではないかと考えられる。また、筆頭研究者の所属は、病院が1990年以前に最も多く1991以後には減少する傾向にある一方、短期大学・大学は1990年以降に増加する傾向がうかがえた。

以上の結果については、1990年の前後は看護研究を行う環境がまだ整わない段階であり、看護研究者を育成する看護大学や研究機関が少なく、研究発表先となる看護系の学会や雑誌も限定されていたという時代背景が影響していると考えられる。原著を含む全体の8割以上が看護師と患者との相互作用を解明しようとする基礎的研究であったことから、「看護師 - 患者関係」に関する研究は発展途上であったと思われる。

2. 研究の内容

本研究の対象文献の研究内容は、「相互作用の分析」「看護師と患者の反応」「相互作用を促進させる要素」「関係成立を困難にする要素」「相互作用を促進させる方法と看護上の効果」という5つのカテゴリーに分類され、これらは日本看護科学学会による「看護師 - 患者関係」の概念規定⁴⁾に著されている内容とほぼ一致していた。

看護においては、健康問題に対する人間の反応を判断してそれに対処していくこと¹⁾が重要であるが、本研究の対象文献においても特に注目されていたのは患者と看護師の反応であった。相互作用を促進させる要素については、看護師や患者の言動や認知のしかたや効果的なアプローチ方法が、事例に基づいて具体的に報告されていた。また、相互作用の成果を判定する評

価の視点には、患者の感情や意志の表出、患者の満足や自立があげられ、患者の肯定的変化に基づいて看護の効果が実証されていた。一方、心を閉ざしたり不満や怒りをもっている患者や精神疾患や終末期の患者など、看護師がコミュニケーション上の困難を感じやすい患者に関する事例研究も行われ、看護師が日常的に患者と接するなかで生じた問題意識が研究への動機づけとなって研究へと発展したと考えられた。1968年から1974年までの文献研究²⁾では看護師が日常接近しにくいタイプの患者への対応に関する事例報告が多く、最終的には「関係解明などの基礎的研究」と「関係改善に関する研究」にまとめられていたが、本研究の対象文献においても、ほぼ同様の方向で研究が蓄積されてきたと考えられる。

近年では、患者の意見を看護の実践や評価に積極的に取り入れ、看護の質に注目した研究がみられる¹¹⁾。特に、看護ケアの評価を数量的に行おうとする研究では、看護ケアの質を評価する測定用具(1992年)¹²⁻¹⁵⁾、尺度(1996年)¹⁶⁾、評価基準(1998年)¹⁷⁻²²⁾の開発が試みられている。また、よい看護とはどのような看護かという調査では、患者がよい状態に変化することとは別に、患者が価値を認め満足することが重要であったと報告されている(2001年)²³⁾。これら一連の研究は、「看護師 - 患者関係」を評価する視点と共通しているが、相互作用の解明や発展というよりは、提供された看護を患者自身がどのように受け止めたかという患者側の視点から評価しようとする動きであると考えられる。

3. 今後の課題

中西らの報告(対象文献は1968年～1974年、研究の記載形式に従った文献は12題)²⁾から本研究(1987年～1994年、68題)までの間には12年～20年の年月が流れているが、この間「看護師 - 患者関係」の研究はほぼ同様の傾向で蓄積されてきたと考えられた。

肯定的・否定的を問わず患者および看護師の反応は「看護師 - 患者関係」に関する研究の重要要素であり、患者側に立って看護を評価するという視点を継続して研究を積み重ね、看護師と患者の相互作用の中に潜む看護の本質的な要素を追求し続けることが重要である。将来的には、研究成果を看護実践の場に活用し、より実践的な研究や仮説検証型の研究が増加して、看護の質の向上に貢献していくことが期待される。

そして、このまま看護の高等教育化が進み、専門看護師・認定看護師制度や看護系大学・大学院教育が定着した時期がくれば、果たして「看護師 - 患者関係」

に関する研究はどのように変化・発展していくのか、文献研究を継続していく必要もあると考える。

本研究の一部は第26回日本看護研究学会学術集会で発表したものである。

文 献

- 1) 井上幸子：看護とは [1], 看護学大系第 1 巻, 第 2 版, p.8, 日本看護協会出版会, 1995.
- 2) 中西睦子, 雨宮悦子：看護師 - 患者関係に関するわが国の研究, 看護研究, 8(4), 273-246, 1975.
- 3) 高橋みや子, 三上れつ：年表で見る日本の看護・看護教育の100年, 看護教育, 41(8), 572-585, 2000.
- 4) 薄井坦子, 兼松百合子, 林 滋子, 原萃子編集：看護学学術用語, p.10, 日本看護科学学会第 4 期看護学学術用語検討委員会, 1995年12月.
- 5) 山本勝則, 内海 滉：看護師 - 患者関係における言語的非言語的コミュニケーションの行動計量学的分析, 患者主導型および看護師主導型会話効果の比較, 日本看護研究学会誌, 12(3), 39-42, 1989.
- 6) 村瀬智子, 濱田悦子, 樋口康子：看護教育における人間関係論の教育効果測定に関する研究(第 1 報), 「発言内容分析基準表」の検証, 日本赤十字看護大学紀要, 3, 32-41, 1989.
- 7) 小代聖香：看護師の認知する共感の構造と過程, 日本看護科学学会誌, 6(2), 76-77, 1986.
- 8) 川名典子：看護師からみた患者の了解不能性の分析, 看護研究, 23(3), 57-68, 1990.
- 9) 吉田滋子：入院中の小児に対する看護師の言動に関する研究(混合病棟において), 人格の発達を支えるという視点から, 日本看護科学学会誌, 12(4), 36-48, 1992.
- 10) 正木治恵：慢性病患者の看護援助の構造化の試み, 糖尿病専門外来看護の臨床経験を通して, 看護研究, 26(7), 621-648, 1993.
- 11) 片田範子：看護ケアの質の評価に関する文献検討. 看護研究, 27 (4), 1994, 70-79.
- 12) 高田早苗, 田村やよい, 小山真理子他：看護ケアの質の測定用具(患者用)の開発(1), 信頼性および構成概念妥当性の検定, 日本看護科学学会誌, 12(3), 34-35, 1992.
- 13) 横山美樹, 小山真理子, 高田早苗他：看護ケアの質の測定用具(患者用)の開発(2), 妥当性の検定, 日本看護科学学会誌, 12(3), 36-37, 1992.
- 14) 岡谷恵子, 田中美恵子, 古庄しおり他：看護ケア

- の質の測定用具（看護婦用）の開発（1）、信頼性および構成概念妥当性の検定，日本看護科学学会誌，12（3），38-39，1992.
- 15) 田村正枝，野並葉子，南裕子他：看護ケアの質の測定用具（看護婦用）の開発（2），妥当性の検定，日本看護科学学会誌，12(3)，40-41，1992.
- 16) 堀内成子，太田喜久子，小山真理子他：看護ケアの質を評価する尺度開発に関する研究，信頼性・妥当性の検討．日本看護科学学会誌，16(3)，31-39，1996.
- 17) 片田範子，内布敦子，上泉和子他：看護の質の評価基準に関する研究，指標開発．看護研究，31(2)，3-8，1998.
- 18) 内布敦子，河野文子，高谷裕紀子他：看護ケア構造指標の開発と検討，試案作成まで，看護研究，31(2)，9-20，1998.
- 19) 内布敦子，河野文子，高谷裕紀子他：看護ケア構造指標の試用と検討，試案のプレテスト結果から，看護研究，31(2)，21-28，1998.
- 20) 山本あいこ，片田範子，大崎富士代他：看護ケア過程指標の開発．看護研究，31(2)，29-35，1998.
- 21) 山本あいこ，片田範子，大崎富士代他：看護ケア過程指標の検証．看護研究，31(2)，37-57，1998.
- 22) 近澤範子，勝原裕美子，小林康江他：看護ケア結果指標と測定用具の開発．看護研究，31(2)，59-69，1998.
- 23) 武村雪絵，菅田勝也：看護者が認識する「よい看護」とその過程．看護研究，34(4)，329-339，2001.

資料「看護婦 - 患者関係」に関する文献（1986～1994 年代順）

- 1) 小代聖香：看護婦の認知する共感の構造と過程，日本看護科学学会誌，6(2)，76-77，1986.
- 2) 今阪洋子・田中希代子他：意欲を失い臥床を続ける患者の看護， - カウンセリング的接触を試みて - ，日本看護学会集録（成人看護），18，144-146，1987.
- 3) 川名典子：看護婦から見た患者の了解不能性の分析，日本看護科学学会誌，7(2)，116-117，1987.
- 4) 古賀八重子・石牧純子他：看護婦の適性を考える（その1）， - 看護学生と看護婦のエゴグラムおよび患者との心理的距離の比較について - ，日本看護学会集録（看護教育），18，152-154，1987.
- 5) 鈴木すゝゑ・田上敏子他：治療に積極的な患者との日常会話の一考察，交流分析を用いて，日本看護学会集録（看護総合），18，61-63，1987.
- 6) 高間静子・岩田和美他：看護婦 - 患者関係における患者の拒否の要因に関する研究（その1）， - 不満，怒りを起させるかかわりあい方と拒否との関係 - ，日本看護学会集録（看護総合），18，71-73，1987.
- 7) 中島靖代・井上三枝子：トラブルの多かった患者の看護を考える， - 交流分析を活用して - ，日本看護学会集録（看護総合），18，64-67，1987.
- 8) 村上由紀・寺本和子他：患者と看護婦の人間関係についての現状調査，よりよい看護ケアをめざして，日本看護学会集録（看護管理），18，113-115，1987.
- 9) 明田恭子：看護婦 - 患者関係の成立・発展を阻む看護婦の精神内界における要因分析， - 一精神科病棟での参加観察をとおして - ，日本看護科学学会誌，8(3)，62-63，1988.
- 10) 小竹友子・福田直子他：外来での短いかかわりあいのなかで，患者の気持ちを思いやり受容・傾聴することの重要性，日本看護学会集録（成人看護・石川），19，181-182，1988.
- 11) 田口牧子・金田悦子他：患者との治療的コミュニケーションにおける時間的割合の効果， - 3事例の分析をとおして - ，日本看護学会集録（看護総合），19，197-199，1988.
- 12) 東屋希代子・北野美樹他：甘え概念の3段階を応用した患者への自立への一援助，日本看護学会集録（看護総合），19，194-196，1988.
- 13) 松本由里：終末期患者に対する看護婦の応答・行動傾向とその関連要因，総合看護，69-85，1988年1月.
- 14) 岡 共余：患者 - 看護者間の人間関係の樹立を試みて， - 躁状態の患者に陽性のストロークをもちいて - ，日本精神科看護学会誌，14，326-329，1989.
- 15) 小野ツルコ・川島和代他：患者 - 看護婦対話場面における看護婦の発言および態度の特徴， - ロールプレイ場面の分析を通して - ，日本看護学会集録（看護総合），20，25-28，1989.
- 16) 廣谷幹代・寺跡葉子他：患者背景からとらえた看護婦の表情・言葉遣い・態度の不満を探る，日本看護学会集録（看護総合），20，18-20，1989.
- 17) 松本佳代子・乾 尚美他：患者が満足を得た看護婦の「傾聴行動」の分析， V T Rによる観察法を用いて - ，日本看護学会集録（看護管理），20，190-193，1989.

- 18) 村瀬智子・濱田悦子他：看護教育における人間関係論の教育効果測定に関する研究（第1報）、「発言内容分析基準表」の検証，日本赤十字看護大学紀要，3, 32-41, 1989.
- 19) 山本勝則・内海 滉：看護者 - 患者関係における言語的非言語的コミュニケーションの行動計量学的分析，患者主導型および看護者主導型会話効果の比較，日本看護研究学会誌，12(3), 39-42, 1989.
- 20) 安東淳子・池田 栄他：学生と患者との人間関係形成に影響を与える要因についての一考察，日本看護学会集録（看護教育），21, 116-119, 1990.
- 21) 石塚百合子：慢性疾患患者 - 看護者の相互作用についての一考察，疾病自己管理に向けての一学生の働きかけの記録から，看護展望，15(6), 720-727, 1990.
- 22) 上野恭子：看護婦 - 患者関係の成立・発展を阻む看護婦の精神内界における要因分析， - 一精神科病棟の参加観察を通して - ，看護研究，23(5), 49-56, 1990.
- 23) 尾池みゆき：学生の患者への共感性について(1)，日本看護学会集録（看護教育），21, 216-219, 1990.
- 24) 川名典子：看護婦からみた患者の了解不能性の分析，看護研究，23(3), 57-68, 1990.
- 25) 川名典子：症例報告にみる了解不能患者と看護介入の特徴，紙上発表された101症例の分析，日本看護科学学会誌，10(3), 112-113, 1990.
- 26) 岸本みくに・大滝ひろみ：末期患者の家族に行なう看護面接の方法と効果，看護学雑誌，54(12), 1207-1212, 1990.
- 27) 小代聖香・南 裕子他：看護婦が「困る」患者に出会う頻度，困難度と燃え尽き，サポートとの関連，日本看護科学学会誌，10(3), 110-111, 1990.
- 28) 田中千鶴子・小山幸代他：患者 - 看護者間におけるユーモアの研究（第一報），神奈川県立衛生短期大学紀要，23, 38-43, 1990.
- 29) 橋本知子：看護婦 - 患者の専門的援助関係における看護婦の「やさしさ」の発展段階，日本看護学会集録（看護管理），21, 189-192, 1990.
- 30) 八田めぐみ・吉田由美他：看護学生と患児との関係形成に影響する要素，日本看護学会集録（看護教育），21, 171-174, 1990.
- 31) 古庄しおり・岡谷恵子：看護婦 - 患者関係が患者の成長に及ぼす影響；境界例の一事例を通して，日本看護科学学会誌，10(3), 158-159, 1990.
- 32) 美谷滋子・下澤聖美他：入院患者における気兼ねとその要因（第1報）， - 遠慮のある生活場面とその背景 - ，日本看護学会集録（看護総合），21, 34-36, 1990.
- 33) 森下節子・鈴木信子他：看護態度の意識， - 看護場面における態度に関する看護学生と看護婦との意識構造の比較 - ，看護展望，15(1), 88-93, 1990.
- 34) 日下智美：看護ケアの質的評価に関する一考察，看護婦と患者の相互行為に焦点を当てて，看護実践の科学，16(8), 54-60, 1991.
- 35) 田中千鶴子・矢野久子他：患者 - 看護者間におけるユーモアの研究（第2報），日本看護科学学会誌，11(3), 182-183, 1991.
- 36) 田中千鶴子・矢野久子他：患者 - 看護者間におけるユーモアの研究（第3報），“笑い”および“ユーモア”発信とP - Fスタディ性格テスト結果との関連，日本看護科学学会誌，11(3), 184-185, 1991.
- 37) 鶴田恵子：患者の持つ看護婦への期待の構造， - 2施設に入院中の成人男性患者との面接を通して - ，日本看護科学学会誌，11(3), 180-181, 1991.
- 38) 広末ゆか：痛みを体験している幼児後期の子どもと看護婦との相互の関係性，第2報；看護婦にとっての子どもの体験している痛みの意味の解釈，看護研究，24(6), 61-69, 1991.
- 39) 柴田弘子・青野真美他：看護場面の言語の研究，患者 - 看護婦の組合せによる会話の展開の相違，日本看護学会集録（看護総合），23, 24-26, 1992.
- 40) 村田恵子・片田範子他：入院児のケアにおける看護婦と母親の役割意識 - 子どもの年代別比較，日本看護科学学会誌，12(3), 188-189, 1992.
- 41) 矢戸裕子・小戸美智子他：自殺企図患者および家族のICUにおけるコミュニケーション過程の検討，日本看護学会集録（成人看護I），23, 153-155, 1992.
- 42) 吉田滋子：入院中の小児に対する看護婦の言動に関する研究（混合病棟において）， - 人格の発達を支えるという視点から - ，日本看護科学学会誌，12(4), 36-48, 1992.
- 43) 飯田幸子・飯田澄美子他：職域健康診断結果の話し合いにおける看護職と受診者の関わりの構造，日本看護科学学会誌，13(3), 180-181, 1993.
- 44) 井出ひろみ・山田明美他：糖尿病の教育入院への看護婦のかかわり，日本農村医学会雑誌，42(3), 260-261, 1993.
- 45) 遠藤淑美：選択緘黙児との関係形成過程，過程展開に關与する条件，日本看護科学学会誌，13(3), 152-153, 1993.
- 46) 佐伯久江・村井英公子・朝野貴代美他：受容的支持を必要とする患者への援助， - 家族分析を取り入

- れた一事例 - , 日本看護学会集録 (成人看護), 24, 93-95, 1993.
- 47) 島田孝子・森田町子他:慢性疾患患者の意思表示に必要な条件と促進要因としての看護者の態度, 日本看護学会集録 (看護総合), 24, 44-46, 1993
- 48) 中島登美子・田上佳士枝他:小児看護臨床実習における学生と子どもの関係形成, 日本看護学会集録 (看護教育), 24, 156-159, 1993.
- 49) 中村美代子・古川陽子他:患者と看護婦の看護ケアに対する認識のズレの比較, 日本看護学会集録 (看護管理), 24, 91-94, 1993.
- 50) 中山千里:看護婦がもちやすい家族への役割期待の問題点の検討, - 障害受容のプロセスを通して -, 日本看護学会集録 (老人看護), 24, 209-211, 1993.
- 51) 蛭田晃子・手島 恵:植物状態患者と家族の相互作用の特徴はそれに関わる要因, 日本看護学会集録 (成人看護), 24, 90-92, 1993.
- 52) 正木治恵:慢性病患者の看護援助の構造化の試み, 糖尿病専門外来看護の臨床経験を通して, 看護研究, 26(7), 621-648, 1993.
- 53) 操 華子・近藤潤子:患者 - 看護婦関係における caring に関する特性の分析, 日本看護科学学会誌, 13(3), 110-111, 1993.
- 54) 板垣昭代・飯田澄美子:患者教育場面における看護婦, 患者・家族のコミュニケーションの分析, 日本看護科学学会誌, 14(3), 234-235, 1994.
- 55) 今川詢子・小林郁子他:看護婦と患者の関わり方と看護婦教育の検討, - 入院患者からみた看護婦の態度・行動より -, 日本看護学会集録 (看護管理), 25, 175-178, 1994.
- 56) 太湯好子:ナースの患者に抱く印象が援助関係に及ぼす影響, 日本看護科学学会誌, 14(3), 196-197, 1994.
- 57) 太湯好子・小柴順子他:ナースの患者に抱く印象が看護におけるコミュニケーションに及ぼす影響, 川崎医療短期大学紀要, 14, 15-20, 1994.
- 58) 小笠原広実:対応困難となった時と看護の方向性を見出した時の看護婦の認識の変化, - 79看護過程の分析 -, 日本看護科学学会誌, 14(3), 222-223, 1994.
- 59) 小笠原広実:対応困難となった看護過程における看護婦の認識とその変化, 総合看護, 3-14, 1994年3号.
- 60) 川畑摩紀枝・村田恵子他:入院患者の看護婦に対する関係認知と関連要因, 日本看護科学学会誌, 14(3), 198-199, 1994.
- 61) 久保博子・山部喜代美他:心を閉ざした患者に自由な感情表出させるための看護援助, - 母親的対応のかかわりをとおして -, 日本看護学会集録 (看護総合), 25, 124-126, 1994.
- 62) 小城原新・坂 梨香:患者・一般の人々の看護に対する期待と評価, 日本看護科学学会誌, 14(3), 194-195, 1994.
- 63) 佐藤栄子:小グループ話し合い形式の糖尿病教室における援助者の関わりと患者の変化, 日本看護科学学会誌, 14(3), 236-237, 1994.
- 64) 小代聖香:看護婦の認知する共感の構造と過程, 日本看護科学学会誌, 9(2), 1-13, 1989.
- 65) 濱畑章子・川西千恵美:看護ケアに対する患者の満足度, - 看護婦が観察した患者の行動との関係 -, 日本看護科学学会誌, 14(3), 346-347, 1994.
- 66) 深井喜代子・杉田明子:対象 - 看護者関係評価尺度の開発, 第一報, 日本看護科学学会誌, 14(3), 200-201, 1994.
- 67) 村田恵子・片田範子他:入院児のケアにおける看護婦と母親の役割意識 - 子どもの年代間の相違 -, 小児保健研究, 53(3), 418-424, 1994.
- 68) 老田香代恵・堀田智子他:交流分析を用いて困った場面における患者・看護婦間のコミュニケーションについての調査, 日本看護学会集録 (看護総合), 25, 121-123, 1994.